研究調査報告

「近代沖縄における祭祀再編と神社」班 石垣島調査報告

後田多　敦
（非文字資料研究センター研究員）

「近代沖縄における祭祀再編と神社」班メンバー５人で 2019 年３月 13 日（水）から 16 日（土）まで、沖縄県石垣島の祭祀空間や戦争遺構などを調査した。参加者は坂井久能、津田良樹、前田孝和、稲宮康人の各氏と後田多敦の５人。今回の主目的は石垣島於茂登(おもと)岳山中に残る八重山神社の場所や遺構の確認である。天気が変わりやすいなか、道なき森を行くということで、３泊４日の日程はその八重山神社跡を最優先した。

八重山神社や戦争関連史跡などに関しては、現地で幾つか具体的な成果を得られたこともあり、前田研究員と坂井研究員がその後の分析を踏まえた論考を執筆する予定。本稿では調査の概要を報告したい。石垣島では、非文字資料研究センター 2018 年度第１回公開研究会（7 月７日開催）で報告してくれた大田静男さん（石垣市立八重山博物館協議会会長）、そして石垣市教育委員会の久原道代さん（石垣市市史編集課長補佐）が協力してくれた。

日	主な見学先
3月 13日（水）	午後石垣島入り（稲宮さん別便）。大田静男さんと久原道代さんの案内で冨崎観音堂、宮鳥御嶽と御嶽裏の「忠魂碑」を見学。
14日（木）	大田静男さんの案内で、於茂登岳の八重山神社跡、尖閣神社、大石垣御嶽ほか市内戦跡調査
15日（金）	奉安殿、権現堂、八重山平和記念館、久原道代さんの案内で八重山博物館、石垣市立図書館資料収集、美崎御嶽ほか

石垣島は八重山諸島の中心島で、面積は沖縄県では沖縄島、西表島について３番目に大きい。1500 年に首里王府の統治下に組み込まれ、琉球国の祭祀制度のなかでも沖縄島やその周辺離島は異なった歴史を持っており、独自性の強い文化を維持している。しかも、沖縄島のように 1945 年の沖縄戦で直接的な戦場とならなかったこともあり、御嶽などは比較的古い形で現存している。

これらの点を踏まえて、八重山神社跡の確認を最優先しながら、伝統的祭祀空間である御嶽（おん）、1500 年以降の建立である寺院、さらには近代や戦時体制下の遺構などを幅広く巡検した。

写真１　冨崎観音堂拝殿。

写真２　宮鳥御嶽のアシャギ。

写真３　宮鳥御嶽の鳥居。

写真４　「忠魂碑」。後ろの林は宮鳥御嶽。

13 日はホテルに到着したときはすでに夕方だったが、近くの冨崎観音堂（石垣市新川）と宮鳥御嶽（みやとりおん、石垣市石垣）、大正時代に建てられた忠魂碑を見学した。観音堂は近くの冨崎に暗礁があり、船の事故が多かったため、安全祈願のために建立されたという。大田さんによれば、桃林寺の義翁長老が経塚を創建し、「妙

法蓮華経」全文を書き写して埋め、石碑を立て「南無妙法蓮華経」の七文字を彫り建てたのが始まりとされるという。場所は何度か移り、中国人から送られた観音をも祀られ 1837 年に冨崎観音堂が建立されたという。

宮鳥御嶽は石垣村発祥と結びついた御嶽。石垣四カ村発祥の地だとされる。信仰心の強い 3 兄妹に神が「この山（宮鳥山）に住み守護神」となろう」と託宣。3 兄妹は拝所を建て、神を崇めたため作物は豊作となった。神のご加護だと人々が集まり石垣村となり、さらに人口が増え四カ村になったという。

「忠魂碑」は 1913 年に当時の石垣尋常高等小学校（現石垣小学校）内に建立された。戦後、場所を移動して、現在の場所となった。

14 日は於茂登岳中腹にある八重山神社跡を目指した。大田静男さんによれば、八重山神社は 1945 年 5 月に建設を始め 6 月には完成。建築任務は田所隊（隊長・田所正路）が担当し、鉄血勤皇隊の学徒も用材運搬作業に動員されたという。切石積でその上に木造の神殿が設置された。ご神体は不明。鳥居も数本あったという。敗戦後の 1945 年 10 月 14 日に石垣地区陸海軍部隊戦没者勇士合同慰霊祭が八重山神社の前で行われたとの記録が残るが、実際に行われたどうかははっきりしないとのこと。敗戦後は放置されていたが、大田さんが 20 年ほど前に改めて場所を確認した。現在でも基壇は残っていた。また、参道跡と思われる石群も確認できた。

於茂登岳中腹に建立された八重山神社をどう考えるか。石垣島の八重山神社については、八重山神社建設奉賛会が敷地を大石垣御嶽（ウシャギオン＝大川）と決定し、1940（昭和 15）11 月 10 日に地鎮祭を行うとの報道がなされていた（『海南時報』昭和 15 年 11 月 11 日）。大石垣御嶽に予定されていた八重山神社と、於茂登岳の八重山神社の関係はどのようなものか。

1945 年 4 月 1 日には米軍が沖縄島に上陸、6 月下旬には日米決戦の決着がついていた。石垣島でも 6 月初頭には役場も於茂登岳などへ避難。「ご真影」は於茂登岳の仮奉安殿に移したという（牧野清『新八重山歴史』320 頁）。戦時体制下での具体的な動きを踏まえながら、八重山神社だけでなく、関連資料の発掘や史実の確認が必要だということがわかってきた。具体的な現場を確認することで、問題点や争点が明確になり、今後の研究への足掛かりとなったことも今回の調査の大きな成果である。

写真 5　八重山神社が建てられた於茂登を含む於茂登連山。八重山神社は手前の於茂登の中腹に建てられた。

写真 6　基壇を確認するメンバー。

写真 7　八重山神社跡の遠景。

八重山神社跡を確認した後は、於茂登岳の反対側・桴海（ふかい）地区に最近建てられた尖閣神社を確認した。尖閣神社は 2000 年 4 月に尖閣諸島魚釣島に建立、外国人によって 2008 年に破壊された。石垣島の尖閣神社は 2019 年 2 月に遷座祭が行われている。尖閣神社は近年の日本の政治状況を反映した動きでもある。近代における石垣島での神社建立の契機を考える上でも参考になる事例だろう。

最近建てられた尖閣神社を確認した後、1940 年 11 月 10 日に地鎮祭を行うとの報道がなされていた大石垣御嶽（大川）も訪ねた。大石垣御嶽は稲の伝来とかかわる御嶽。伝承によると、アンナンからタルファイとマル

写真８　尖閣神社を鳥居の前から望む。左下に社務所がある。

写真９　本殿。

写真 10　半分に折れた尖閣神社と刻まれた石。魚釣島から持ってきたものと思われる。

写真 11　大石垣御嶽の一部。

ファイの兄妹が米の種子を持って八重山に移住し、兄がここで稲作を始め、島人に稲作方法を伝授したという。これが八重山に稲が伝来した始まりだとされる。そして、タルファイ（兄）の墓が大石垣御嶽となった。御嶽の土地が 1899（明治 32）年に分割売却されたため、現在の御嶽エリアは分割され、縮小したものだ。拝殿は近代以降も何度か改築された。大石垣御嶽では、現在も大川地区のオンプール（豊年祭）などが盛大に開催され、地域の御嶽として生きている。

大石垣御嶽の場所で進められていた「八重山神社」と、於茂登岳山中に建てられた「八重山神社」との関係を明らかにすることも今後の課題である。

＊

今回の調査は大田さんに案内してもらったこともあり、祭祀だけではなく戦争関連の遺構・遺跡についても、前述した石垣の「忠魂碑」のほか、大浜の「忠魂碑」などを幾つか訪ねた。

大石垣御嶽の近くには「大東亜戦争陸海軍全没者合葬碑」（大川）が残る。大田さんによれば、この碑は八重山旅団によって 1945 年 12 月に建立され、12 月 8 日に合同慰霊祭が行われたという。「大東亜戦争陸海軍全没者合葬碑」の下には東西 200 メートルほどの旅団壕があったが、その入り口は現在塞がれている。久原さんの父親は、戦時中にその地下壕のなかに入ったことがあり、その記憶をもとに地下壕の様子を絵に書き残していた。メンバーは、その絵の一部も見せてもらった。

また、大石垣御嶽の近くの登野城小学校構内（登野城）には、奉安殿（石垣市指定文化財）が残されている。この奉安殿は 1930（昭和５）年に設置されたもので、建物の位置は移動されて向きは変更したが、ほぼ昔のままで保存されている。石垣市教育委員会の田盛竜太郎さんに扉を開けてもらい、内部の木製の棚も見せてもらうことができた。外観のアーチ状の屋根にはレリーフの菊花紋が鮮明に残る。沖縄内では４か所で残っているという。

大浜地区の海軍南飛行場の格納庫（掩体壕（えんたいごう））跡も訪ねた。1944（昭和 19）年に建設された石垣島海軍南飛行場の施設としてつくられたとのこと。掩体壕の幅は 15 メートルということで、小型の飛行機の格納用だった。

＊

天川御嶽（登野城）は、登野城村の御嶽として毎年恒例のオンプール（豊年祭）などもここで行われる。現在でも地域の信仰の対象となっている。

美崎御嶽（石垣市登野城）はオヤケアカハチの乱（1500 年）のときに首里王府派遣の兵船の那覇港への安着を祈願して、神女の真乙姥（マイツバ）が籠もったところといわれている。現地役人が旅立つ際や王府役人の離着任時、農耕儀礼を行うときに高官や大阿母（ホールザー）が礼拝する場所だった。拝殿の東側には石門があり、その奥にあるイビと空間が仕切られている。石門の上には火炎宝珠が配され、首里の園比屋武御嶽との類似性も指摘されているという。美崎御嶽は 1956（昭和 31）年に建造物と史跡の両方で沖縄県の文化財に指定されている。

美崎御嶽は、琉球国時代の八重山における国家祭祀

写真 12　海軍南飛行場の格納庫（掩体壕）。

写真 13　「大東亜戦争陸海軍全没者合葬碑」。

写真 14　奉安殿。

写真 15　天川御嶽のイビの石垣と門。

写真 16　美崎御嶽。

の中心で、最高の神格をほこる御嶽で、蔵元管理の公儀御嶽（クギオン）と呼ばれた。美崎は一般の御嶽と異なり、庶民が祈願し豊年祭を行うような御嶽ではない。現在の美崎御嶽境内には、蔵元の「火ぬ神」と「ユーヌ火ぬ神」がある。蔵元の火の神は琉球国時代の蔵元（いわば琉球国時代の王府の出先機関。八重山や宮古などに置かれた）のものだが、蔵元が無くなり、さらに戦後この場所に移動されたという。ユーヌ火の神は由来はよくわからなかった。

３泊４日の駆け足調査だったが、参加した班員がそれぞれの関心から研究を深める契機となったと思う。ここでは、私が自分のテーマとの関連で気づいた幾つかの点を挙げておきたい。まず、八重山神社の動向は戦時下の動きを抜きには理解できないということ。そして、それは小さな島という空間と戦争の問題であるということ。近代の御嶽再編との関連でいえば、公儀御嶽だった美崎御嶽の重要性を再確認した。美崎御嶽に、なぜ二つの「火ぬ神」があるのか。火ぬ神は琉球の国家祭祀の中核をなすものの一つ。琉球国滅亡後の「火ぬ神」の具体的な移動と、信仰の継続や担い手の問題は、祭祀再編の背景を理解する上で重要である。

祭祀と直接関係がないと思われる戦争関連遺構も、結果的に多く確認することになったが、それもまた石垣島の特徴なのかもしれないと考えた。「戦場」にはならなかったが、「戦場」への備えとしての動きである。沖縄には日本軍の慰安所がおよそ 130 か所確認されている。八重山では 11 か所だといわれている。日本人の行くところに神社と慰安所があり、沖縄にも慰安所もつくられた。神社と慰安所。近代沖縄の神社を「海外神社」の文脈でとらえる意義や、近代沖縄に建てられた神社の意味を考える上で、慰安所の存在を視野に入れる必要があることを再認識した。

今回の調査は大田静男さん、久原道代さんの案内でとても充実したものとなった。なかなか全体を整理できないが、今後の調査研究に生かしたい。ほか、八重山博物館で説明してくださった寄川和彦さん（八重山博物館学芸員）にもお世話になりました。ありがとうございました。

【参考・主な図書】
牧野清『新八重山歴史』（私家本、1972 年）
牧野清『八重山のお嶽・嶽々名・由来・祭祀・歴史』（あ～まん企画、1990 年）
喜舎場永珣『新訂増補　八重山の歴史』（国書刊行会、1975 年）
大田静男『八重山の戦争』（南山舎、1996 年）
『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果』（沖縄県埋蔵文化財センター、2015 年）
洪玧伸『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』（インパクト出版会、2016 年）
『軍隊は女性を守らない－沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』（「女たちの戦争と平和資料館」、2012 年）